

## 戯曲『シャクンタラー姫』の和訳（2）

—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために（3）—

金 沢 篤

書物は、それがいかなるものであれ、われわれにとっては神聖なものである。セルバンテスは、おそらく人の言うことなどなになに一つ耳を貸さなかったであろうが、書いてあるものなら、「通りに落ちている紙きれ」でさえ拾って読んだのだ。  
J.L. ボルヘス<sup>(1)</sup>

### はじめに

一冊の書物との出会いがその人の一生を決める、それは大いにあり得る、と思う。一人の運命を変えるばかりではない、多くの人を巻き込んで大きな潮流を引き起こすことも大いにあり得るのである。本稿は、表題からも明らかな通り、筆者が数年前から継続している「わが国に於ける「カーマ・シャーストラ」の受容史」を構築する研究の一環である。そして直接的には、多くの人にとって運命の書となったカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の邦訳をめぐっての研究、金沢篤[2009]の続編と言うべきものである。金沢[2009]は、筆者としてはかなり詳細に論及したもので、その大筋には今後大きな修正は不要だろうと予想されたものであった。したがって、筆者自身が新たな問題設定を行うのでなかったなら、その続編をこうして早速に用意することになろうとは思っていなかった。その「シャクンタラー姫」と出会って大きく影響を受けた人物の少なくないことは周知の通りだが、その実態を歴史的な立場に立って、具に検分することを目指した書誌学的研究である。近代日本にあって、誰が「シャクンタラー姫」を読んで感動し、どういうリアクションを起こしたのかを探る試みと言い得る。もっと細かく言うならば、その人は、どの本を読んで感動を

受けたのか? インドの古典語で書かれた「シャクンタラー姫」を読んだのか、それならば、どのテキストで読んだのか、それとも飜訳を読んだのか、ならば、誰の飜訳で、いつどこで出版された書物を読んだのか、とまでの突っ込んだ作業である。

わが国で、日本語によってカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」が紹介されてからも、まだ100年ほどしか経過していない。全訳を通じて世界に初めてそれが紹介されたのは、Sir William Jones による英訳によってであった。1789年のこと。まだ200年ほどしか経過していない。いやもう200年以上も前のことにわれわれは仰天するのである。あのゲーテがその Jones の英訳に基づいて Forster によって1791年に作られた独訳を読んで感動したこともはや伝説となっているほどだ。こうして書き連ねていると、簡単に聞こえるかも知れないが、日本人が Jones の英訳を読むことは出来たのだろうか、それともゲーテと同様 Forster の独訳を読むことが出来たのだろうか。年代だけを頭に置いて、「誰それにはそれを読むことは可能であった」と言うことは可能であるけれども、実際にそれを読んだのかどうかを決めることはとてつもなく複雑な手続きが必要となる。本人が明確にそれを記してくれているのが何よりだ。たとえば、筆者が先に立証した「南方熊楠氏が「カーマストラ」を読んだのは、1911年7月31日に入手したラメレスによる仏訳である」といった場合のように<sup>(2)</sup>。さて、シャクンタラー姫の場合はどうか。

本稿は、金沢[2009]発表後に、筆者がはからずも遭遇することになった①木内英実[2007]と②泉芳璟[1917]<sup>(3)</sup>と③土屋榛南[1913]の3点に端を発している。①は、インターネット上でたまたまそのPDFに遭遇した。②と③は、筆者の金沢[2009]を目にした面識のなかった一研究者のご教示で知ったのである<sup>(4)</sup>。①はわが国における「シャクンタラー姫」の受容に関わる一つの資料として、直接的には、公になっているとは夢にも思わなかった岸田辰彌[1922]についての興味深い知見を与えてくれた。②は、泉芳璟氏の業績調査に関わってきた筆者としては、それを看過してきた自身の迂闊さを嘆かしめる重要な資料である<sup>(5)</sup>。

③は①同様、インド文化そのものが、飜訳を通じて、近代日本の一般文化人にも深く影響を与えていたことを証するやはり生々しい貴重な資料である。この土屋榛南氏に知るところはないとしても、土屋文明氏なら周知である。土屋榛南が、アララギ派の歌人土屋文明氏の別号であることを知る者は少ないはず

だ。実は歌人の土屋文明氏が、われわれが関心を寄せる「シャクンタラー姫」の物語を秘かに紡いで秘かに公にしていたのである。題して「舍君多羅姫物語」。さて、土屋文明氏は、如何なる「シャクンタラー姫」を通じて、自らの「舍君多羅姫物語」を紡ぎ出したのだろうか。あっても知られなければ存在しないも同然だが、一度びあることが知られたならば、それについて考究することをどうして控えることが出来るだろうか。

これらの諸点についての論究が、本稿を構成することになるのだが、カーリダーサの傑作戯曲「シャクンタラー姫」の受容に関して決定的な重要性を持つ世界最初の近代語による翻訳、1789年という年代と不可分であるかの、Sir William Jones による記念すべき英訳と、その種々刊本についての考究も併せ試みたいと考える。カーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」のわが国初の全訳は、高橋五郎・小森彦次[1907]であるが、その底本となったのが、Jones の英訳であったことは金沢[2009]でもしっかりと確認したものの<sup>(6)</sup>、如何なる刊本があって、高橋・小森[1907]が如何なる刊本に基づいて成立したかの考証は未だしである。

## I. 中勘助、岸田辰彌と戯曲「シャクンタラー姫」

中勘助氏の「菩提樹の蔭」は、昭和4年10月『思想』89(192910)(19281120署名)に発表された。インドを舞台にしたカタカナ表記の名前を持つインド人の昔の物語である。木内英実[2007]は、その標題から知れる通り、『銀の匙』などの作者として名高い作家の中勘助氏の「菩提樹の蔭」(193104:単行本刊行)の成立をカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」との関係のうちに探ろうとする論攷である。

「菩提樹の蔭」は、一見して、「シャクンタラー姫」との繋がりを示す手の作品ではない。ならば、何故両者が比較の俎上に上げられるのか。中勘助氏自身が、そのことに言及しているわけでもないし、中氏が、カーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」を絶賛していたり、感動したことがあると言っているわけでもない。ならば、何故木内氏は、そのような標題の下での作業に着手したかということ、中勘助氏の遺された蔵書の中に独訳「シャクンタラー姫」のレクラム文庫<sup>(7)</sup>があったせいであろう。中氏が「シャクンタラー姫」の独訳を所蔵していたということは、中氏が生前、それを読んだ可能性がある。読んだならば、それに影響を受けていてもおかしくはない。しかも中氏には、この「菩

提樹の蔭」のみならず、さらに有名な「提婆達多」など、インドを舞台にしたインドの物語がある。同じ夏目漱石門下の森田草平氏は、かなり本格的な「シャクンタラー姫」の物語、森田草平[1914]をものしている。また、観劇の経験を踏まえて、好んでそれに取材した作品をものしている中勘助氏であるが、当時、宝塚歌劇団による歌劇「シャクンタラ姫」が上演もされている(1922年～)。そう、木内氏は、こうした状況証拠の下で、「菩提樹の蔭」と「シャクンタラー姫」の比較作業に着手したということである。舞台も登場人物名にも共通な点は皆無、状況証拠のみに基づく両物語の比較そのものには、現在の筆者はこれ以上深入りするつもりはない。ただ筆者には、木内氏がその作業の過程で召喚した種々の資料に関する具体的な情報に興味があるばかりである。

なによりも筆者はこの木内[2007]によって、泉芳璟氏も言及し、筆者も前稿、金沢[2009]で触れた<sup>(8)</sup>、宝塚歌劇団によって上演された歌劇「シャクンタラ姫」の元になる岸田辰彌氏による台本が活字化されて公表されていることを知ることが出来た。インターネット上でその上演の痕跡を眺めるだけで、その実際に関しては想像をたくましくするしかなかった筆者であるが、その台本を具に検分できたのである。有名な洋画家岸田劉生氏の弟である岸田辰彌氏は、ではどのような「シャクンタラー姫」に依拠して、その台本を仕上げたのだろうか。岸田辰彌氏自身が、自らの歌劇「シャクンタラ姫」について、何を語っているのだろう。筆者は残念ながら寡聞にして知ることはないが、堀正旗[1922]の冒頭「春期第二回公演に上場されてゐるサクンタラーは、岸田先生が深い自信を抱いてゐられるものである。それに対する批評なり感想なりは、これを他の人々に譲ることゝして、私はその原作及び原作者を御紹介したいと思ひます。」(56頁)に注目しておきたい。堀氏が、その「原作及び原作者を御紹介」するに何に依拠したかも不明である。岸田辰彌氏がカーリダーサの全七幕の戯曲「シャクンタラー姫」を、全二場の歌劇「シャクンタラ姫」にリメイクするにあたって、何に依拠したかを問うことが筆者の目下の課題である。

## II. 土屋榛南の「舍君多羅姫物語」

土屋榛南[1913]の末尾には、著者による「舍君多羅姫物語につきて」と題する一文が付されている。少し長いが、その全文を引用しよう(漢字には詳細なカタカナによる読みが付されているが、それは割愛する)。

「舍君多羅姫の原作は、印度の沙翁と呼ばれる迦利陀沙によつてかゝれた、

七幕の印度劇である。迦利陀沙は西暦第五世紀頃の人とせられて居る。印度第一の詩人であつた。此の舍君多羅の一曲は最も傑作とされて居る。古代から印度に傳はる神話傳説を材料としたものである。作中に出づるヅシヤンタ王は實に、印度に並びなき名門月統のプル系に出でて居る。總てが婆羅門教の信仰上に成立つて居るのは云うまでもない。殊に末段の如きは殆婆羅門教の諸神崇拝によつて出来て居る。

舍君多羅の戯曲が十八世紀末に独逸で翻譯されると忽に世の好評を博したのであるが、當時の詩聖と呼ばれたゲーテは大に之を稱して、世界最高の文学と推稱した。實にゲーテの最大傑作たるファウストは其の形式に於て此に負ふ所が多いという話である。

舍君多羅の戯曲は、其後英獨の譯も色々出来た。チャールスラム兄妹の沙翁物語ですら、沙翁の価値を傳へることは出来ぬといはれて居る。況して予が此の試の如きはたゞ、荒筋を傳へるにも足りぬものである。読者はよろしく梵文の原作は讀まぬまでも、英獨等の譯によつてなり、此の世界最美の文学に接せられんことを切望する次第である。」（165 頁）

そして、それが、『アララギ』第 87 卷第 3 号の「土屋文明特集号」に転載・再録された際に、雑誌編集に携わる山田恒子氏によって、以下のように解説が付されたのである。

「〔解説〕 最近或る人からこの「舍君多羅姫物語」のコピーを示された。コピーの際に奥書を入れそこねて、その年月日が不明である。この物語の事は土屋先生の著作目録の類に見えず、「榛南」の筆名も私は初見である。・・・＜後略＞（山田恒子）」（19 頁）

山田氏はこのように簡単に片付けたが、おそらく同誌の編集者の別の一人であるだろう清水房雄氏が、この土屋 [1913] に関して、やや丁寧な「「舍君多羅姫物語」解説補」、清水 [1994a] を書いている（274 頁）。清水氏は、「シャクンタラー姫」について、「マハーバーラタ」中の「シャクンタラ姫」の説話に基づいてカーリダーサによって作られたと説明し、「一七八九年サー・ウィリアム・ジョーンズの英訳以来、十数種の外国語訳がある」とし、田中於菟弥 [1959] の解説などによって、本邦での「シャクンタラー姫」の紹介例を見ると「土屋先生の「舍君多羅姫物語」は英訳から重訳して物語化したものと思ふが、「波斯神話」の場合同様、本邦最初の紹介らしい」（274 頁）としている。そして初出誌である「台湾愛国婦人」第 50 卷は関連資料より「大正二年一月号」と正しく推理している。

さらに清水氏は、「署名の「榛南」は勿論、榛名山の南の意」とする等、色々考証を展開しているが、筆者としては今は清水氏による以下の一節にだけ注目しておきたい。

「明治四十四年五月八日付寺田憲宛土屋文明書簡（「寺田家文学資料集成」所収）中に、「先日いただき申候金はメーテルリンクの蜂の生活とカリダッサのサクンタラー姫とをいづれも英語訳にて買ひ求め申し候」とあるが、その英語訳はジョーンズの物かどうか。英訳も数種ある由だから判らない。何しろジョーンズ訳の一七八九年と言へば、本邦では江戸時代、徳川家斉將軍の初期である。」(274 頁)

いかがだろうか。明治四十四年と言えは1911年である。そして、清水氏は、「英訳も数種ある由」だから、土屋先生が依拠した「英語訳がジョーンズの物かどうか」「判らない」としているのである。興味深い問題点である。筆者が前稿、金沢[2009]で「シャクンタラー姫」に関して全面的に展開した作業が、清水氏によって先取りされていたことを知るのである。土屋文明氏の弟子筋の清水房雄氏にとって、師である土屋文明氏の「舎君多羅姫物語」の歴史的な位置づけが常に大いに気になっているらしく、清水氏はこの後も、この問題について四度までも言及している。清水[1994b][1994c][1995a][1995b]である。

清水[1994b]では、最近の古書目録中に「明治四十年初版、高橋五郎訳、「梵劇さくんたら姫」という本」を見いだしたこと、実見していないので、それが「サンスクリット原典からの訳出か、或いは英訳本などからの重訳」(200 頁)かも不明であることが簡単に報告されている。清水[1994c]は、河口慧海[1924]を実見した結果、高橋・小森[1907]を含めて、わが国に於ける「シャクンタラー姫」の翻譯・紹介の実情についてさらに知見を深めたことが報告された。

続く、清水[1995a]は、その標題が示す通り、清水[1994b]の後日譚。結局『梵劇さくんたら姫』は入手できなかったが、国立国会図書館の所蔵本を実見して得られた知見が報告されている。訳者の一人である高橋五郎氏や、また河口慧海氏と河口[1924]の関与者たる鈴木重信氏の素性などまでも含めて、かなり詳細な記述を展開している。本稿とのからみでのみその記述を眺めると、清水氏が、高橋・小森[1907]の凡例の記述として引いている次の一文に改めて注意を促しておきたい。

「一、原曲はもと歌曲と科白と相錯綜して成れるものなれども、訳者は、ウイリアム・ジョオンズが英訳にかゝる散文本（一千七百九十九年刊行）を基



礎としたるをもつて、今敢て是れを分たずして、全く散文的韻文を用ゐてものしたり。<sup>(9)</sup>」（清水[1999]271頁）

高橋・小森[1907]の「凡例」のこの記述を踏まえて、清水氏は、「ジョオンスの英訳本は一七八九年初版の由—後述、河口慧海の解説参照—だから、高橋の用いたテキストは初版本ではない事になる」（272頁）と記している。筆者も前稿、金沢[2009]で同じ個所に注目し、「これが「一千七百八十九年刊行」の誤記／誤植か、それとも再版などで文字通り「一千七百九十九年刊行」かは不明」（409頁註記（21））と註記したのであった。この問題に関しては、Sir William Jones の英訳の種々の刊本の調査を踏まえて後で論じるつもりである。

これら、土屋[1913]に関連する清水房雄氏<sup>(10)</sup>の清水[1994a][1994b][1994c][1995a]の4点は、いずれも清水[1999]に収録されることになる。この清水[1999]には、その4点の内容と重複する個所を含む「私の土屋文明」と題された講演録、清水[1995b]も収録されている。歌人土屋文明氏の知られざる一面を紹介しようとの意図にもとづくそこでの清水氏のその話の要点は、結局「その人 [= 高橋五郎：筆者註] の訳が「シャクンタラー」の本邦最初です。そして二番目が今言った土屋先生のもの。三番目は、サンスクリット原典から訳して大正十三年十一月に刊行されたもので、訳者は河口慧海というお坊さん。」（375頁）に尽きている。だが「シャクンタラー姫」翻訳・紹介の実情は、そのように単純なものでないことは、金沢[2009]でも明らかであろう。土屋[1913]が「何の二番目」かも明確ではないのである。土屋[1913]の内実が何であるかも何一つ突き詰められていないのである。土屋[1913]が「舎君多羅姫物語」と題されていることは事実としても、清水氏はいつの間にか、土屋文明氏自身による、「舎君多羅姫物語」末尾の、先に見た「舎君多羅姫物語につきて」の一節を忘れてしまっているように思われる。身びいきというものであろう。

すなわち、この土屋[1913]はカーリダーサの戯曲『シャクンタラー姫』の翻訳とは言えないのである。その「粗筋／梗概」とも呼びたくなければ、「翻案もの（ノベライゼーション）」と呼ぶべきであろう。いずれにしても、アララギ派の歌人土屋文明氏が、わが国に於ける「シャクンタラー姫」の最初期の紹介者の一人であることは間違いないところである。

### III. ウィリアム・ジョーンズの英訳について

1789年にカルカッタで刊行された、カーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の記念すべき世界初訳、Sir William Jones による英訳は、いわゆるB本と呼ばれるサンスクリット原典からのものである<sup>(11)</sup>。また、カーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の、わが国最初の全訳は、高橋五郎、小森彦次両氏の共訳になる高橋・小森[1907]で、Jonesの英訳、Jones[1789]から100年以上も後の1907年の刊行。その和訳の底本となったのが、先にも述べた通り「ウィリアム・ジョーンズが英訳にかゝる散文本(一千七百九十九年刊行)を基礎としたるをもつて」と訳者自身によって明言されているように、それが誤記や誤植でないとなれば、1789年ではなく、1799年に刊行されたものということになる。

インドのカルカッタで刊行されたJones[1789]は、英国ロンドンでは、1790年と1793年、エディンバラでは1796年に再版された<sup>(12)</sup>らしい。そのJones[1789]に基づいて、G.Forsterが1791年に独訳して刊行し、それをゲーテが読んだのである。ロシアの作家N.M.Karamzinはやはり、Jones[1789]に基づいて第一幕と第四幕を露訳して『モスクワ・ジャーナル』1792年5月号に発表した。ドイツでもロシアでも、カーリダーサの傑作戯曲「シャクンタラー姫」は、わが国の場合と同じく、Jonesの英訳からの重訳によって初めて網羅的に紹介されたのである。その後、Jones[1789]は、1799年と1807年の2回、ロンドンで編集刊行されたSir William Jones 著作集の中に収録されることになる。即ち1799年の6巻本選集の内の第6巻と1807年の13巻本選集の内の第9巻の一篇としてである。今回筆者が参照できたJonesの英訳「シャクンタラー姫」は、このJones[1799]とJones[1807]と、1870年に単独でやはりロンドンでリプリントされたJones[1870]の3種類と、1902年にロンドンで刊行された「シャクンタラー姫」(William Jones 訳)「雲の使い」(H.H.Wilson 訳)「バガヴァッド・ギーター」(Ch.Wilkins 訳)の3篇から構成されたT.Holme編の作品集、Holme[1902]中のJones 訳「シャクンタラー姫」の、計4種類である。Holme[1902]の1902年4月の日付のある編者T.HolmeによるIntroductionに、“The edition now offered of Sakuntala is a reprint of the play as it appeared in the collected works of Sir William Jones, published in six volumes in 1799, slightly abridged.”(p.xvi)とあることに注目したい。

さて、1907年に刊行された高橋・小森[1907]は、何度も言及しているように、翻訳の底本を「ウィリアム・ジョーンズが英訳にかゝる散文本(一千七百九十九



年刊行)を基礎としたるをもつて」と明記している。では、高橋・小森[1907]の底本は、文字通りに1799年に刊行されたJones[1799]と考えるべきか、それとも、Holme[1902]に収録されたJones[1799]と考えるべきか。ドイツ語で「シャクンタラー姫」の重訳を作ってForsterが刊行したのが1791年、ロシア語で「シャクンタラー姫」の重訳部分訳を作ってKaramzinが発表したのが1792年である。高橋、小森両氏が日本語で「シャクンタラー姫」の重訳を作って刊行するのが1907年である。1900年代の日本人にとって、100年以上も前の18世紀にロンドンで刊行された書物を入手することはやはり相当に難しいのではないかと筆者は考えたのである。いや、運がよければ可能だろう、あるいは刊行年度などいつでもいいのでは、リプリントならば、いつでも中身は同一ではないか、などと言うなかれ。このSir William Jonesによる世界初訳「シャクンタラー姫」の場合は、特別の配慮が不可欠である。現代のようにサンスクリット語のローマ字転写法が確立を見ていない近代インド学最初期の時代の英訳である。Jonesの依拠したサンスクリット原典はB本であると言われているが、その実態からして不明であるという事情も考慮すべきであろう。そして今の場合、特に戯曲「シャクンタラー姫」の登場人物たちの名前の表記に注意を払うべきである。カーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の主要登場人物たちの表記について調査したところを以下に記す。Sir William Jonesの場合と同様のB本の第2番目の全英訳者であるArthur W.RyderのRyder[1912]と、D本の全英訳の代表者と言うべきMonier Monier-WilliamsのM.-Williams[1855]に於けるローマ字表記も並記したい。

## 【B 本】

Jones[1799/1807/1870]

Dushmanta

Mádhavya

CannaSacontalá

Priyamvadá

Anusúyá

Gautamí

Cumbhílaca

Jones/Holme[1902]

**Dushyanta**

Madhavya

Canna**Sakuntala**

Priyamvada

Anusuya

Gautami

Cumbhilaca

Ryder[1912]

Dushyanta

Madhavya

KanvaShakuntala

Priyamvada

Anusuya

Gautami

pickpocket/fisherman

## 【D 本】

M.-Williams[1855]

Dushyanta

Máthavya

Kanwa

Śakoontalá

Priyamvadá

Anasúyá

Gautamí

thief/Fisherman

いかがだろうか。Jones 訳の登場人物たちのローマ字表記は独特のものがあるが、Jones[1870]までは、母音の長音記号も含めて、基本的に変化はない。最初の Jones[1789]は参照できなかったものの、Jones[1799]も Jones[1807]も Jones[1870]も同一である。サンプリングした8名に関してそれをカタカナ表記で置き換えるならば、上から順に、「ドゥシュマンタ<sup>(13)</sup>」「マーダヴィヤ」「カンナ」「サコンタラー」「プリヤンヴァダー」「アヌスーヤー」「ガウタミー」「クンビーラカ」となる。それが、Holme[1902]では、長音記号はすべて省略されている他、主人公の一人、「プル属の王」の表記が「ドゥシュマンタ」から「ドゥシュヤンタ」に、「サコンタラー」が「サクンタラ」に変わっていることを看過すべきではない。それらを、同じB本の英訳と考えられる Ryder[1912]と比較しておくべきであろう。Holme[1902]と新訳の Ryder[1912]の違いは、シャクンタラー姫の養父の名前が、「カンナ」に対して「カンヴァ」となっている点、ヒロインの名前がようやく「サクンタラ」から「シャクンタラ」となった点、Jonesの英訳では、第6幕冒頭部に登場して、失われた指輪を見いだす人物の漁夫の名前として処理されていた「クンビーラカ／クンビラカ」が、普通名詞 kumbhīraka「スリ／盗人」になり、登場人物としては dhīvaraka「漁夫」が全面に出てくることになる。

またD本の英訳たる M.-Williams[1855]に於ける表記との比較を通じて、B本とD本の違いも確認しておこう。王に仕える道化の名前が、B本の英訳では、「マーダヴィヤ／マダヴィヤ」であるのに対して、D本の英訳では、「マータヴィヤ」となっている点、シャクンタラーの女友達の一人の名前が、B本の英訳では「アヌスーヤー／アヌスヤ」であるのに対して、D本の英訳では、「アナスーヤー」となっている点に注目したい。この2点は、繙訳の登場人物名からそれが依拠した底本がB本かD本かを手軽に識別する目印となるものである。

以上の検討を踏まえて、以下にはカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」のわが国への受容を果たした初期のサンプルの登場人物名を見てみたい。特に本稿で新たに追加・紹介されたサンプルである前節で言及した土屋榛南[1913]と宝塚歌劇の台本、歌劇「シャクンタラ姫」、岸田辰彌[1922]の出自を客観的に探ってみたい。

D	B	?	D/B	?	D	B
高楠 [1903]	高橋小森 [1907]	土屋 [1913]	森田 [1914]	岸田 [1922]	島 [1926]	森田 [1930]
ドシュヤンタ	ドゥシヤンタ	ヅシヤンタ	ヅシヤンタ	ドウシヤンタ	ヅシヤンタ	づしやんた
マータヅヤ	マダヴィヤ <sup>(14)</sup>	マドハヴィ	マタ(ダ)ヅヤ		マータギヤ	まだびや
カヌヴァ	カンナ	カンナ	カヌブ	カヌブ	カンブ	かんな
シャクンタラー	サクンタラ	サクンタラ	シャクンタラ	シャクンタラ	サクンタラー	しゃくんたら
ブリヤムヴァダ	ブリヤムヴァダ	ブリヤンヴダ	ブリヤンバタ	ブリアンヴァダ	ブリヤンブダー	ぶりやむばだ
アナスーヤー	アヌスヤ	アヌスヤ	アナ(ヌ)スヤ	アヌスヤ	アナスーヤー	あぬすや
ガウタミー	ゴオタミ	ゴウタミ	ガウタミ	ゴウタミ	ガウタミー	がうたみ
漁父 / 夫	クムビラカ	漁夫	漁夫	タムビラカ	漁夫	漁夫

D本に立脚していることが明らかな最初の高楠順次郎 [1903] のは、先に見た M.-Williams[1855] とほとんど完全に重なる。底本を Jones[1799] と明言している高橋・小森 [1907] は、「ドゥシヤンタ」としている点だけからも、文字通りの Jones[1799] を底本としたものではなく、Jones[1799] のリプリントであることを明言している Holme[1902] を底本としたものであることがわかる。では、次の土屋榛南 [1913] は、何に立脚したものであろう。「マドハヴィ」「アヌスヤ」より、土屋 [1913] は明らかに B 本の特徴を有している。前節で見た通り、1911 年 5 月 8 日付けの寺田憲宛書簡で、土屋文明氏は、「サクンタラ姫」英訳本を入手したと記している。やはり土屋文明氏が入手した英訳本は Jones の英訳以外は考えられないのである。しかも、高橋・小森 [1907] が底本とした Holme[1902] であったろうと推測される。土屋氏は、高橋・小森 [1907] を見ていない、知らないと考えられる。「ドゥシヤンタ」と「ヅシヤンタ」、「マダヴィヤ」と「マドハヴィ」、「ブリヤムヴァダ」と「ブリヤンヴダ」、「ゴオタミ」と「ゴウタミ」の違いがそれを証していよう。高橋・小森 [1907] と土屋 [1913] が同じ Holme[1902] に立脚しているのなら、どうして「クムビラカ」と「漁夫」の差異が起こるのだろうか。これは前者が飽くまでも戯曲「シャクンタラー姫」の全和訳であり、後者が戯曲「シャクンタラー姫」に取材した粗筋、梗概、ノベライゼーションであることから説明されるであろう。

続いて岸田辰彌 [1922] の検討に移りたい。宝塚歌劇団による上演を前提とした岸田辰彌氏による全二場のこの歌劇「シャクンタラ姫」は、どのようにして成立したのだろうか。「アヌスヤ」とあることから、岸田 [1922] も B 本系と言

える。だが、もはや時代も時代である。高橋・小森[1907]といった日本語による原戯曲の全和訳を初めとして、「シャクンタラー姫」に言及する日本語による種々の出版物や紹介も出そろってきている。こうした中、岸田辰彌氏が、ある一つの書物に基づいて歌劇「シャクンタラ姫」を創作しようとするものだろうか。「サクンタラ」を「シャクンタラ」と表記している点で、新しさを感じさせる。「カンナ」としないで「カヌヅ」としているところに新風を感じる。ただし、興味深い点の一つ。岸田辰彌氏が、他では見かけないキャラクターを登場させている点は看過すべきではない。すなわち「タムピラカ」である。最初の登場人物の紹介の個所では、「タムピラカ(漁夫)」とある。タムピラカとは、失われた指輪を見いだす漁夫の名前である。少なくとも、この名前タムピラカは、戯曲「シャクンタラー姫」に関わる某かの洋書から仕入れたものでないことがわかるであろう。そう、岸田[1922]は、本邦初訳の戯曲「シャクンタラー姫」、高橋・小森[1907]に依拠して成立したとだけは言えるのではないか。岸田[1922]の「タムピラカ」は、Holme[1902]という Jones の英訳の重訳である高橋・小森[1907]の「クムピラカ」なしには成立を説明できないものである。岸田氏は、知ってか知らずか、高橋・小森[1907]の「クムピラカ」の「ク」を「タ」、「ピ」を「ビ」と読み替えているのである。

森田草平[1914]と森田[1930]、島準人[1926]については、前稿、金沢[2009]で既に検討済みと言い得るが、改めて気づいたことをコメントしておきたい。島[1926]と島[1928]は、D本の独訳である Ernst Meier[1852]を中心に、同じくD本の英訳、M.-Williams[1855]などに立脚しているのであるから、「マータギヤ」「アナスーヤー」とある。ヒロインの名前を「シャクンタラー」ではなしに「サクンタラー」としているのは Meier の独訳表記にならったのであろう。ここで、興味深く思われるのが、B本に対する第2番目の全英訳である Ryder[1912]に依拠していることが明らかな森田[1914]が、Ryder[1912]に倣って「カヌヅ」を採用しているにも拘わらず、「マタヴヤ」と「マダヴヤ」、「アナスヤ」と「アヌスヤ」を併用していることである。これは金沢[2009]でも明言した通り<sup>(15)</sup>、森田[1914]が、D本に立脚した高楠[1903]の序文とB本の第二の英訳である Ryder[1912]の両者に依拠して成立したものであるせいであろう。だが、森田[1914]とその再利用版?の森田[1930]を、今回改めて検分してみたところ、表に見る通りのことが明らかになった。森田[1914]で、人物名はすべてカタカ

ナ表記であったものが、森田[1930]ではすべて平かなに統一されていることである。そして、B本に立脚したものらしく、「まだびや」と「あぬすや」に統一された上に、Jones 訳でのみお馴染みの「かな」表記が採用されているのである。この変化をどのように説明したらよいのだろうか。時局というファクターを慎重に考慮すべきかも知れないのである。

以上で、Sir William Jones の英訳の種々刊本の検分に基づく考究を終えるが、その成果を反映させて改めて以下のようにカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の原語原典と翻訳の歴史（改訂版）をまとめた。

《戯曲「シャクンタラー」翻訳史：原語原典と翻訳》（改訂版）

- 1789**    **Sir William Jones**    英訳    **B**
- 1791    Georg Forster    独訳（Sir William Jones 英訳からの重訳） **B**
- 1792    Nikolai Karamzin    露訳（Sir William Jones 英訳からの重訳：第一幕 & 四幕） **B**
- 1799**    **The Works of Sir William Jones (6 vols)**    英訳    **B**
- 1803    A. Bruguière    仏訳（Sir William Jones 英訳からの重訳） **B**
- 1807**    **The Works of Sir William Jones (13 vols)**    英訳    **B**
- 1830    A. D. Chézy Bengali 本 (B)
- 1842    Böhtlingk Devanagari 本 (D)
- 1852    Ernst Meier    独訳    **D**
- 1853    Monier Williams Devanagari 本 (D)
- 1855**    **Monier Williams**    英訳    **D**
- 1870**    **Sir William Jones (Reprint)**    英訳    **B**
- 1872    C. Brukhard Devanagari 本 (D)
- 1873    Richard Pischel SouthIndian/Dravida 本 (S)
- 1876    Monier Williams Devanagari 本 (2<sup>nd</sup> Ed.) (D)
- 1877    Richard Pischel Bengali 本 (B)
- 1884    Karl Brukhard Kashmir 本 (K)
- 1902**    **Sir William Jones (T. Holme 編)**    英訳    **B**
- 1910    Saradaranjan Ray D/B/K? 本 (B/K)
- 1912**    **Arthur W. Ryder**    英訳    **B**
- 1920    Laurence Binyon 英語シナリオ    [D]

1922 Richard Pischel Bengali 本 (2<sup>nd</sup> Ed.) (B)

.....

1954 A. Scharpé KAlidAsa-Lexicon

1962 M.B. Emeneau 英訳 B

2006 Somadeva Vasudeva Kashmir 本 (K) 英訳

高楠順次郎 [19031110]・・・原語原典 D:C.BrukhardEd.

高橋五郎・小森彦次 [1907]・・・翻訳 (Sir William Jones 英訳) B

河口慧海 [1908-1910]・・・翻訳 B 古文体訳未刊 (2011 年第 2 幕のみ公刊)

土屋榛南 [1913]・・・翻案 (梗概) (Sir William Jones 英訳) B

森田草平 [1914]・・・編訳・梗概 (Arthur W.Ryder 英訳) B

松村武雄 [1915]・・・解説・梗概 (Monier Williams 英訳) D

野中勇真・江連政雄 [19160617]・・・翻訳 (第一幕のみ) 雑誌『智山学報』B

泉芳璟・野中勇真・江連政雄 [1916-1917]・・・翻訳 新聞『中外日報』[B]D

岸田辰彌 [1922]・・・翻案 (歌劇「シャクンタラー姫」) (高橋・小森 [1907] 等) B

泉芳璟・江連政雄 [1922-23R]・・・翻訳 D (Saradaranjan Ray 本)

河口慧海 [1924]・・・翻訳 B

島準人 [1926]・・・翻訳 (Ernst Meier 独訳) D

島隼人 [1928R]・・・翻訳 (Ernst Meier 独訳) D

森田草平 [1930]・・・編訳・梗概 (Arthur W.Ryder 英訳) B

河口慧海・鈴木重信 [1937R]・・・翻訳 (第四幕のみ) B

河口慧海 [1942R]・・・翻訳 B

辻直四郎 [1943]・・・翻訳 (第四幕の一部) D

辻直四郎 [1956]・・・翻訳 B

田中於菟弥 [1959]・・・翻訳 B

田中於菟弥 [1974R]・・・翻訳 B

辻直四郎 [1977R]・・・翻訳 B

杉浦義朗・吉沢紀子 [1994]・・・翻訳 D

#### IV. 『シャクンタラー姫』の和訳をめぐる泉芳璟と河口慧海

今回筆者に新たにもたらされた資料、泉芳璟 [1917]によると、前稿、金沢 [2009] においては謎として残さざるを得なかった幾つかの点が、解明されるように思



われる。泉[1917]は、泉芳璟氏の、自らの「シャクンタラー姫」和訳をめぐる、既に立派な全訳を持っている河口慧海詣でのドキュメントであり、河口慧海氏へのネゴシエーションが不成功に終わったことの所産だということである。泉芳璟（共）訳「シャクンタラー姫」に対する河口慧海氏の辛辣な批評は、後年、河口慧海[1924]の巻末の「記念指輪 シャクンタラー姫に後書す」に結実することになった。それらの手厳しい河口氏の評言のうち、泉芳璟氏にとって最も耳痛かったのは「印度の實際に接せざる人々……が如何に労苦されたりとて、その真趣に到達し能わざりしは無理ならぬことと云うべし」（下112頁）という件ではなかったか。

話が前後することになるが、泉芳璟氏は、『中外日報』紙に翻訳連載が完結したら、早々にそれをまとめて単行本として刊行する計画を持っていたに違いない。だが、60回の連載完了後、共訳者を江連政雄氏ただ一人にして、それを単行本として刊行するまでに、5年もの歳月を要したのである。泉芳璟氏が、サンスクリット原典からの全和訳と謳ってカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の刊行を果たすのは、1923年のことである。その間に、「印度の實際に接せざる人々」というハンディを背負った泉芳璟氏はそれを克服すべく、インド欧州留学を経験することになる。インド欧州留学を終えてから、手直して、やっと刊行にこぎつけたというところ。一方、「印度の實際」にそれこそ十二分に接してきた河口慧海氏によるカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」の立派な和訳が単行本の形で陽の目を見るまでには、どれほどの時間が必要だったのだろうか。「印度の實際」を踏まえて作られた河口慧海訳「シャクンタラー姫」は、軽々と真趣に到達しているとはいえ、それを表わす言葉があまりにも古すぎて、当世の読者に受け入れられないだろう、との認識が河口氏にも強く湧いたと考える他ない。鈴木重信氏の手助けを得て旧訳の装いを一新して河口慧海訳「シャクンタラー姫」が上下巻二冊の単行本として目度く刊行されたのは、泉・江連共訳の「シャクンタラー姫」刊行の翌年、1924年のことである。わが国で、ともかくもカーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」のサンスクリット原典からの直接訳が単行本として出たのは、Jonesの英訳からの重訳本、高橋・小森[1907]が刊行されて20年近くも後のことであった。

以下には、サンスクリット原典からの和訳に関わった二人のインド学者、泉芳璟氏と河口慧海氏の動きを眺めてみたい。

[19161116]

泉芳璟「シャクンタラー(第一回)序言―訳者を紹介す―」『中外日報』第5178号

[19161116-19170206]

泉芳璟・共訳「シャクンタラー」(60回連載)『中外日報』第5178～5242号(江連政雄・野中勇真共訳/第4回目以降は共訳)

[191612]

泉芳璟、河口慧海宅訪問

[19170117-0119]

泉芳璟「河口慧海氏とシャクンタラーの翻譯」(上)(中)(下)『中外日報』第5225～5227号

[191808-192006]

泉芳璟、インド・欧州留学

[19221110-1203]

河口慧海「著者寺本婉雅氏に『西藏語文法』の絶版を要求す」『中外日報』

[19221225/1923]

泉芳璟共訳「梵語戯曲シャクンタラー」『光壽』第5/6輯<江連政雄>[緒言:  
192210]

[1923]

泉芳璟共訳『梵語戯曲シャクンタラー』光壽會:大連<江連政雄>[緒言:  
192210]

[1924]

河口慧海訳『シャクンタラー姫』上下 世界文庫刊行会:東京[「記念指輪 シャクンタラー姫の後に書す」192306]

こうして、今回本稿附篇として紹介することの出来た泉芳璟[1917]を読み、泉芳璟氏の2年間に亘るインド欧州留学を時系列的に並べてみると、1922年10月の日付を持つ泉芳璟氏の「緒言」が、河口慧海氏に言及していないことの意味が明確になるのではないかと。また、1923年6月の日付のある「記念指輪 シャクンタラー姫の後に書す」の中で、泉芳璟氏の訳業などに対して「某新聞に某氏の翻譯掲載せられたるもの」とし、「・・・何れも印度の實際に接せざる人々のこととて・・・さらにこれによつて重訳を試みたるわが訳者が如

何に労苦されたりとて、その真趣に到達し能はざりしは無理ならぬことと云ふべし」と一蹴していることの意味が明確になるのではないか。ここには、いつの時代にも研究者たちの間に静かに燃え上がる薄ら寒いような確執がほの見えるのである。泉芳璟氏のインド欧州留学が、直接的には、1916年12月の泉芳璟氏の河口慧海宅訪問を契機として成立したと言いたいほどである。奥山直司[2003]には、泉芳璟氏の大谷大学での同僚寺本婉雅氏とその河口慧海氏との確執が描かれているが、その一節に以下のようにあるのを看過すまい。

「慧海の一連の批判に対する寺本側の反論が、十二月九日付の『中外日報』に載った「答弁の価値なしで結論」である。これは大谷大学の西藏研究会での茶話会の模様を記者がまとめたもので、出席者は、寺本と同僚の大谷大学教授泉芳璟、さらに桜部、山口ら研究室の学生たちであった。実は泉にも、『中外日報』に連載した『シャクンタラー』の和訳を慧海にこき下ろされた悔しい思い出があった。」（324頁）

12月9日とは、1922年のものだが、奥山氏が言われる、「実は泉にも、『中外日報』に連載した『シャクンタラー』の和訳を慧海にこき下ろされた悔しい思い出があった。」が、具体的には何をさしてのものか、筆者には不明である。直接的には、河口慧海氏宅を訪問した折のことと理解すればいいと思われるが、もしかしたら、筆者は未だ知らないものの、寺本婉雅氏に対する河口慧海氏の談話と同様な河口慧海氏の記事が、やはり『中外日報』紙に掲載されたのであろうか。先にも触れたように、『中外日報』の記事の重要さは承知しているものの、その判読作業のしんどさから、『中外日報』のバックナンバーの渉獵を怠って、未だ筆者はそれに類した記事を探し当てていない。

筆者に許された時間の関係から、河口慧海[1924]の内実を解明する最も重要な資料、最新の河口[2011]を活用し得ていないことは遺憾の極みである。したがって、この稿はまだまだ書き継がざるを得ないと考えている。往年のインド学仏教学研究の実情を探る上でも第一級の資料となる泉芳璟[1917]も、掘り下げなしに、ほとんど放置したままである。

### むすびにかえて：残された謎々

河口慧海訳「シャクンタラー姫」の底本となったヴィドヤーサーガラ本についての資料がファクシミリ版<sup>(16)</sup>でついこのほど刊行された。河口慧海の古訳の内実も部分的（第2幕のみ）ではあるが同時に明らかになった。辛抱強く判

読して論究し、その成果は別稿に聞きたい。今は河口慧海訳の底本は、本人によれば、D本ではなしにB本ということになるが、河口訳の底本は、B本なのか、D本なのかと問うたなら、B本というよりは、むしろD本に近いのだということを確認だけしておきたい。河口訳は「アヌスーヤー」ではなく、「アナスーヤー」である。また、失われた指輪が見い出されるB本第6幕冒頭部の重要なエピソードが、D本訳の代表と言える Monier Williams 訳（1855）と同じく、第5幕と第6幕の間に「中幕」として現れるという点を指して言うのである。

河口訳の謎の解明と共に、新たな資料の発見に努めたいと考える。近代日本にあって、カーリダーサの戯曲「シャクンタラー姫」に惹かれた人は、まだまだ潜んでいると考えられるからだ。（未完）

### 【附篇：旧資料再録<sup>(17)</sup>】

#### 河口慧海氏とシャクンタラーの翻譯（上）

大谷大学教授 泉芳璟\*

シャクンタラーが掲載されてからこのかた、幸に先輩諸先生から種々の同情と讃辞とを頂戴して、訳者にとっては実に過分の光栄と喜んで居る次第である。

そこでこんな題を出して置くと、読者諸君或は早合点して河口慧海氏がシャクンタラーの翻譯に対して、大に推讃の辞を寄せられたのだらうなど、思はれるかもしれないが、事実は決してさういうわけでないから、一応前以て御断りして置く。

私は過ぐる十二月の中ごろ、短い日子を利用して東京へ勉強に出かけた。主として帝大の梵文学研究室に保管せられてある梵文經典の写本を見せて貰ふためであったが、久しぶりで先輩知友にも逢って種々の方面から刺激を受けたいといふ希望を抱いて、冬季休暇の始まらぬうちにとあたふた急いで出かけたのであった

ところで研究室で高楠\*博士が何やらかやらの話の序でに、「君はこのごろ中外日報へシャクンタラーの訳を出してゐるさうだが、実は河口慧海\*君が印度で勉強して翻譯を作つて有つて居る筈だよ」と云ふやうな意味のことをちらと云はれた。博士は更に附け加へて「自分も曾てシャクンタラーの原文を翻刻した当時、翻譯にかゝつては見たが、其の後何だか正体の知れぬつまらない翻譯が、有象無象の手によりて出されるといふ有様で、もうすっかりやる気が出ないので、其儘にうっちゃってしまったのだ、全くもうこのごろのやうに、わ

からず屋が印度のものを彼れ是れと翻訳したりなんかするのは、甚しい侮辱である<sup>(18)</sup>」といふやうな意味を、厳格な調子で話されたと記憶する。我々のやったシャクンタラーの翻訳も、印度研究者の甚しい侮辱でありはしないか。博士の言葉はそういふ意味まで含んで居たかどうか、自分は博士の意を測りかねて二の句が出なかったから只黙って居た、恐らく少し顔を紅くしてゐたことであらう。

然し静かに考へて見ると、自分には少しも疚しい心が無し、別に杜撰な翻訳を提供したとも思はない、少くとも一度は梵文原書に引き合せて居る。尤も訳の形式は意の達するを主として逐字訳をしなかった。全く逐字訳としたら殆んど何の感興も惹かないのであるから。ヨーロッパの人たちが出した訳もすべてこの形式である。

然し河口慧海氏が翻訳したといふ印度でやったと云へば我々の訳より以前に出来たとせねばならぬ。すれば是れ先輩である。先輩に対して須く教を乞はざるべからずと、他の用件もあり、当日直ちに小石川は小日向台の河口氏の邸宅を訪ねた。

（『中外日報』第 5225 号：1917 年 1 月 17 日）

## 河口慧海氏とシャクンタラーの翻訳（中）

### 大谷大学教授 泉芳璟

江戸川で電車を下りて、夕暮の街は師走の人通り忙はしげな中を縫うて、高台へ坂を登れば、冬枯れの屋敷町、教へられたやうに、河口氏の邸宅の玄関に立ったのは、てうど点灯しごろ。

初対面の自分に打ち解けし胸襟を開いた河口氏の話しぶりはうれしかった。ダージリンの茶などもよばれた種々の話が出た。間を見計らって、シャクンタラーのことを一寸云ひ出すと、氏は少し気色ばんで、あれは困る、あゝいふ翻訳が世の中へ出るやうでは甚だ困るといふやうな意味のことを云はれた。自分は原書としてモニエル、ウイリアムス氏のものを唯一の拠として其他を知らないことを云ふと「いやそのモニエル、ウイリアムスが甚だよろしくない原書だ。自分は四五種の原書を所有して居るが、最も芝居に適当なと思はれる一本から翻訳を作った、まあ見て下さい、これだ」と、厚いノウトを出された。恰も折ふし居合はされた長井真琴\*氏と自分との前へそのノウトを開いて、序幕と第一幕との朗読が始まった。

この本読みを聞きつゝ、自分の頭には種々の考が徂徠した。翻譯の良否はともあれ、偶数頁に原文を書き写し、奇数頁に翻譯を書いた大冊のノウトは、実にこれ驚くべき努力勉強の結晶である。而も世間は全くこれを知らないのである。自分は静かに云った「悪く取って頂いては困る若し私がかやうな翻譯のあることを知ってゐたならば、決して翻譯に着手しなかったのだしたろう」長井氏も傍から「私も随分此処へ伺つても居りますが、あなたがこんな翻譯をしてお出でのことは見るも聞くも今が始めてゝす」と驚いて居る。自分は言葉を次いで「さて私共の翻譯は元より不十分なものではありますが、その不十分なところを或は補ひ或は創つて、立派なものにしたいといふ希望なのですから、出来得べくんば貴君の翻譯と合揉するやうに御配慮下さる余地はありませうか如何でせうか」と云へば「それはよくありますまい、やはり自分自分の考がありませうから、今これを一所にしてどうしやうといふわけには行きますまい」と到底承引の気色が見れなかった。

朗読の間に二三の批評が我々の翻譯の上に加へられた、其の中最も注意すべきものはまず第一幕のプリヤンヴダとアナスーヤとを侍女と訳しては不可ないといふこと、仙居には侍女なるものは居るわけが無い。これは友達とせねば不可ないといふのである然しこれは知らないわけでは無かったので、我々も始めは友達と訳したのであった。原語サクヒは友達とあるが至当であらう。だが前後の状態からシャクンタラーを一際美しくあでやかに見せやうとするのには事を侍女としてしまう方が適當かと思ふ。この類この一事のみでは無い印度の風俗人情の以て我が国土に移し難きものは、多少の変更を加ふる必要があることは、云ふまでもないのである。次に感謝すべきは第十三歌翻譯の指摘であつた「弦ずれの疵もつ腕のいかばかり守護に甲斐なきかゞ解りませう」といふ意味のところは、全く反対で「弦ずれの疵もつこの腕がどんなに守護をして居るかゞ解りませう」と改めねばならぬこれは原文のキイヤッドなる一語、「いかばかり」「どんなに」の意味を取り違へたから起つた翻譯である。この語は大量少量の両様に用ふるところから思ひ違ひをしたのだつた。

さて自分は我々の翻譯が出来る以前に河口氏の翻譯が出来てゐたといふことを世間に対して明かにして置きたい。又氏が数種の原本を所有して居ることも明かにして置きたい。而して最後に氏の訳について甚だ失礼ではあるが一言したいのである。

（『中外日報』第 5226 号：1917 年 1 月 18 日）



## 河川慧海氏とシャクンタラーの翻訳（下）

大谷大学教授 泉芳璟

こんな云ひ方をしては非常に失礼ではあるが、率直に云ふならば、氏のシャクンタラーの翻訳は文に於て人を惹きつける力があるかどうか疑はしい。少くとも自分はこれによってさしたる感興を覚えなかった。このことは氏もさまで反対ではなからうと思ふ。それは「いづれ世に公にするのには今少し手をいれねばならぬ」と云ふやうな意味のことを話されたのでも知れる。全く誰か文学的天分の裕かな手によって、行文にうるほひを附けなければ、現代の文壇に将た劇壇にカーリダーサの傑作として提供するのは如何であらうか。

自分は西藏探検家、研究家としての氏に多大の尊敬を有し、又加ふるに梵語研究の深き造詣といふ点にも劣らぬ敬意を有して居る。然しながら文がよく人を魅すると否とは、生れつきにもよるから、氏に対してあまり多くを期待しても居なかったし又期待すべきでもないと思ふ。氏にして其の訳を世に出さるゝに意あらば、先以てこの点に注意せられねばなるまい。

一日を隔てゝ、東洋大学に氏の西藏語の講座を參觀させて貰った。其の序に、**高島米峰**\*氏訪ねて種々の話を聞いた。其の時にも一寸シャクンタラーのことが話題に上った。米峰氏は例の歯ぎりのいゝ調子で造作もなく次のやうなことを語った。「イヤあれには困りましたよ。何しろ中外にシャクンタラーが出たといふので、河川君は僕のところへや来て、大いに憤慨して云くさ、こんなものが出る位なら僕の訳したのは是非世に出さねばならぬ。君のところで出版してくれと云ふわけだ。困ったがまあとにかくなだめて置いた次第です。とにかく真面目に憤慨してゐるんですからね。それに此頃は演芸評論だの何だの、芝居などの書物を持って行って一生懸命に読んでゐる様子ですよ。」快活に語って氏は大きな声で笑った。こんなことを書いて米峰氏の迷惑になりはしないかとも思つて見たが、否々氏の平生に徴して見ても、云った事は云ったこと云はぬことは云はぬこと、云った事に対しては飽まで言責を負ふといふ性質については疑を容るゝ余地が無いから、此に氏の言を引き合ひに出して、自分が河川氏の翻訳に対する品格の必ずしも失当でないと云ふ裏書をしたまでである。

これを要するに翻訳は種々の条件が具はらねばならぬ。中にも、原文に忠なることゝ行文の妙と此の二つが最も大なる条件であつて、而も此の二つは多くの場合一致しないのである。原文さへ読めない連中の重訳は素よりしやうが無いが、徒らに原文に忠なるばかりで現代の人を引きつけるチャームが無くては

これまた何ともしやうがない。氏の訳は或は後者に近きものではないか。

然しこれは必ずしも直らないことはない。だから何時かは氏の訳が体裁を整備して文壇に打って出る日が必ずあらう。否それは近き将来であるかも知れぬ。我々は只従来ヨーロッパから日本へかけて最も普通に読まれ来ったモニエル、ウィリアムス氏の梵文原書に依って訳を作ったのであって其他を知らぬ。但しこれが契機となって益々良翻譯が相次で出づるやうになるならば此上なき幸である。今現に少くとも多年河口慧海氏の筐底に蔵められた一本を世に紹介するに至った如きことも確かにこれ我々の翻譯が齎した一の貢献では無いか。此一事すら以て満足するに値すと云ふべきである。（完）

（『中外日報』第 5227 号：1917 年 1 月 19 日）

【略号・参考文献】

- Belvalkar, S.K.  
 [1965]: *The Abhijñānaśākuntala of Kālidāsa*, New Delhi.  
 Bongard-Levin, G. & Vigin, A.  
 [1984]: *The Image of India: The Study of Ancient Indian Civilisation in the USSR*, Moscow.  
 Cappeller, Carl  
 [1909]: *Kālidāsa's Śakuntalā (Kurzere Textform)*...., Leipzig.  
 Emeneau, M.B.  
 [1962]: *Kālidāsa's Abhijñāna-śakuntala*, Univ. of California Press: Berkeley & Los Angeles.  
**Figueira, Dorothy Matilda**  
 [1991]: *Translating the Orient: The Reception of Śākuntala in Nineteenth-century Europe*, New York: SUNY Press.  
**Holme, T., ed.**  
 [1902]: *Sakuntala, or the Fatal Ring, a Dram: to Which is Added, Meghaduta, or the Cloud Messenger, the Bhagavad-gīta, or, Sacred Song, by Kalidasa*, London: W. Scott (Scott Library 117).  
**Jones, Sir William**  
 [1789]: *Sacontalā, or the Fatal Ring: an Indian Drama, by Cālidās*, Calcutta.  
 [1870]: *Sacontalā, or the Fatal Ring: an Indian Drama, by Cālidās: reprinted from the translation of William Jones*, London: C. Tucker.  
 Kale, M.R.  
 [1898/1969]: *The Abhijñāśākuntalam of Kālidāsa*, Delhi.  
**Karamzin, N.M., tr.**  
 [1792]: "Stseny iz Sakontaly, indejskoj dramy," *Moskovskij zhurnal*, 1792 Maj.  
**Kellner, Hermann Camillo**  
 [1890]: *Sakuntala, Drama in Sieben Akten von Kalidasa*, Leipzig.  
 Meier, Ernst  
 [1852/1867/[n.d.]]: *Kalidasa's Sakuntala. Ein indisches Schauspiel*....[Stuttgart] Leipzig.  
**Monier-Williams, Monier**  
 [1853/1876/1976]: *Śakuntalā: A Sanskrit Drama, in Seven Acts*, Hertford/Oxford.  
 [1855/1895/2005]: *Śakoontalā or The Lost Ring: An Indian Drama*, Ventnor/New Delhi.

- Pichel, Richard  
 [1877/1922]: *Kalidasa's Śakuntala*, Harvard Oriental Series vol.16: Cambridge (Mass.)  
**Ryder, Arthur W.**  
 [1912/1920//1959]: *Shakuntala and Other Writings by Kalidasa*, E.P.Dutton & Co., Inc.: New York  
 Ray, Saradaranjan  
 [1908//1922/1924/1927]: *Kalidāsa's Abhijñāna-śakuntalam, with an Original Sanskrit Commentary...*,  
 Calcutta.  
 Scharpe, A.  
 [1954]: *Kalidasa Lexicon Vol.I: Basic Text of the Works, Part I Abhijñāśakuntalā*, Brugge.  
 Sutro, Alfred, tr.  
 [1901]: *The Life of the Bee by Maurice Maeterlinck*, London: G. Allen.  
 Vasudeva, Somadeva  
 [2006]: *The Recognition of Shakuntala by Kālidāsa*, New York.  
 Vidyasagar, Eshwar Chandra  
 [1860R]: *A Tale from the Sakuntala of Kalidasa*, 5<sup>th</sup> Edition, Calcutta.  
**Worsworth, Jonathan**, introduced  
 [2001]: *Sakuntala; or, the Fatal Ring 1807*, Otley: Woodstock Books.

姑射良

[1917]: 「シャクンタラー姫物語」『印度神話』群書堂書店：東京 357-387 頁

阿部知二

[1966]: 訳『ヴァールミーキ ラーマーヤナ』河出書房：東京

泉芳璟 <1884-1947>

[1916]: 「シャクンタラー（第一回）序言—訳者を紹介す—」『中外日報』第 5178 号

[1917]: 「河口慧海氏とシャクンタラーの翻譯」(上)(中)(下)『中外日報』第 5225 ~ 5227 号

[1923]: 印度学会訳編『印度古典 カーマスートラ（性愛の学）』印度学会：京都

[1924]: 訳『カーリダーサの歌へる印度の自然』印度学会：京都

[1931]: 著『印度漫談』人文書院：京都

泉芳璟・江連政雄・野中勇真

[1916-1917]: 関・共訳「シャクンタラー」（60 回連載）『中外日報』第 5178 ~ 5242 号（江連政雄・野中勇真共訳／第 4 回目以降は共訳）

泉芳璟・江連政雄

[1922/1923]: 共訳「梵語戯曲シャクンタラー」『光壽』第 5/6 輯 <江連政雄>〔緒言：192210〕

[1923]: 共訳『梵語戯曲シャクンタラー』光壽會：大連 <江連政雄>〔緒言：192210〕

大地原豊

[1989]: 訳『公女マールヴィカーとアグニミトラ王 他一篇』岩波文庫

[1991]: 訳・解説『宰相ラークシャサの印章—古典サンスクリット陰謀劇—』東海大学出版会：東京

奥山直司

[2003]: 著『評伝 河口慧海』中央公論社：東京

金沢篤

[2005]: 「『カーマ・スートラ』は如何に受容されたか？—『印度愛経文献考』周覧（１）『駒澤大学佛教学部論集』第 36 号

[2006a]: 「『印度愛経文献考』周覧（２）—異訳・異本・異版の問題を中心に—」『駒澤大学佛教学研究紀要』第 64 号

[2006b]: 「ラメレス訳『カーマ・スートラ』の変遷—『印度愛経文献考』周覧（３）—」『駒澤大学佛教学部論集』第 37 号

[2009]: 「戯曲『シャクンタラー姫』の和訳—「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために—」

- 『駒澤大学佛教学部論集』第40号  
 [2011]:「泉芳璟教授著訳書論文目録―「カーマ・シャーストラ」受容史構築のために(2)―」  
 『駒澤大学佛教学部研究紀要』第69号  
 河口慧海<1866-1945>  
 [1924]:訳『シャクンタラー姫』(上)(下)世界文庫刊行会:東京→河口[2000]  
 [1942]:訳『シャクンタラー姫』学藝社:東京  
 [2000]:訳「シャクンタラー姫」『河口慧海著作集 第14巻』うしお書店:新潟(出雲崎町)  
 [2009]:訳『シャクンタラー姫』(日高彪校訂:河口慧海著作選集4)慧文舎:東京  
 [2011]:「印度歌劇シャクンタラー姫草稿ノート」『河口慧海著作集補巻一』USS出版:東京  
 河口慧海・鈴木重信  
 [1937]:訳「印度歌劇シャクンタラー姫 第四幕」『印度文学読本』印度学研究会:東京  
 岸田辰彌<1892-1944>  
 [1922]:「歌劇 シャクンタラー姫」『歌劇』第22号  
 木内英実  
 [2007]:「中勘助の「菩提樹の蔭」成立におけるインド歌劇「シャクンタラー姫」の影響」『小田原女子短期大学研究紀要』37号 157-168頁  
 木村秀雄  
 [1947]:訳『カーリダーサ選集1 季節集』秋田屋:大阪  
 [1965]:著訳『カーリダーサ文学集 季節集・雲の使者』百華苑:京都  
 桑原武夫  
 [1954]:「榊亮三郎先生のこと」『文藝春秋』4月号  
 近藤健  
 [1967]:訳・文「シャクンタラー」(カーリダーサ原作)『少年少女世界の名作文学42』小学館:東京  
 島準人<1890-1960>  
 [1926]:訳「サクンタラー姫」『古典劇体系17』近代社:東京  
 [1928]:訳「サクンタラー姫」『世界戯曲全集40』世界戯曲全集刊行会:東京  
 [1963]:著『島青魚詩集』島先生遺稿集刊行会:東京  
 清水房雄  
 [1994a]:「『舎君多羅姫物語』解説補」『アララギ』第87巻第3号→清水[1999]  
 [1994b]:「『梵劇さくんたら姫』といふ本のこと」『アララギ』第87巻第10号→清水[1999]  
 [1994c]:「『シャクンタラー』本邦紹介初期の事」『アララギ』第87巻第11号→清水[1999]  
 [1995a]:「『梵劇さくんたら姫』のこと、後日譚」『愛媛アララギ』→269-275頁→清水[1999]  
 [1995b]:「私の土屋文明―最初の印象その他―」『短歌研究』→清水[1999]  
 [1999]:著『斎藤茂吉と土屋文明―その場合場合―』明治書院:東京  
 鈴木重信<1890-1920>  
 [1920]:訳『耆那教聖典』世界聖典全集刊行会:東京  
 [1922]:訳『仏陀の生涯と思想(ピツシエル原著)』甲子社書房/新光社出版:東京  
 杉浦義朗・吉沢紀子  
 [1994]:共訳『戯曲:ああ、愛しのシャクンタラー』角川書店:東京  
 鷹谷俊之  
 [1957]:著『高楠順次郎伝』武蔵野女子学院:東京  
 高木昌史  
 [2006]:編訳『ゲーテと読む世界文学』青土社:東京  
 高楠順次郎<1866-1945>  
 [1898]:著『梵文学教科書』金港堂書籍株式会社:東京  
 [1903]:刊『詩聖カーリダーサ作 梵語戯曲シャクンタラ(梵文学十二原書第一篇)』文明堂:東京

高桑駒吉

[1908]: 著『印度五千年史 附錫崙島史』大日本図書株式会社: 東京

高橋五郎 <1856-1935>

[1904]: 訳『ファウスト』前川文栄閣: 東京

高橋五郎・小森彦次

[1907]: 訳『梵劇 さくんたら姫』前川文栄閣: 東京

高山龍三

[2000]: 「解説 シャクンタラー姫」『河口慧海著作集 第14巻』

[2002a]: 「国内の著作にみる河口慧海（二）」『黄檗文華』第121号

[2002b]: 編著『展望河口慧海論』法蔵館: 京都

[2005]: 「国内の著作にみる河口慧海（五）」『黄檗文華』第124号

[2011]: 「国内外の著作にみる河口慧海（三）」『黄檗文華』第130号

田中於菟弥

[1959]: 訳「シャクンタラー姫」『インド集（世界文学大系4）』筑摩書房: 東京

[1967]: 著『インドの文学（世界の文学史9）』明治書院: 東京

[1974a]: 訳「シャクンタラー姫」『インド・アラビア・ペルシャ集（世界文学大系9）』筑摩書房: 東京

[1974b]: 著『酔花集—インド学論文・訳詩集—』春秋社: 東京

[1991]: 著『インド・色好みの構造』春秋社: 東京

辻直四郎

[1943]: 訳「カーリダーサ作戯曲「シャクンタラー」より」『南方民俗誌叢書5 印度』偕成社: 東京

[1956]: 訳『シャクンタラー』刀江書院: 東京

[1970]: 訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波書店: 東京

[1973]: 著『サンスクリット文学史』岩波書店: 東京

[1977]: 訳『シャクンタラー姫』岩波書店: 東京

辻直四郎他

[1959]: 「世界文学大系・月報17」『インド集（世界文学大系4）』筑摩書房: 東京

[1972/2000]: 「学問の思い出—座談会=辻博士を囲んで」『東方学』第43輯 / 『東方学回想VI』東方学会

土屋榛南（土屋文明） <1890-1990>

[1913]: 「舍君多羅姫物語」『臺灣愛國婦人』第50巻

[1994]: 「舍君多羅姫物語」『アララギ』第87巻第3号

中勘助 <1885-1965>

[1984]: 著『菩提樹の陰 他二篇』岩波文庫

中野義照

[1966]: 訳註『インドの純文学』（ヴィンテルニッツ著）日本印度学会: 高野町

野中勇真・江連政雄

[1916]: 訳「シャクンタラー」『智山学報』第三号

原田章子

[1981]: 文・絵『インド古典劇より シャクンタラー物語』はるぷ出版: 東京

平等通昭

[1937]: 編著『印度文学読本』印度学研究会: 東京

堀正旗

[1922]: 「サクンタラーに就て」『歌劇』第27号

松村武雄

[1915]: 「『シャクンタラー』物語」『印度文学講話』阿蘭陀書房: 東京

松本文三郎

[1903]: 著『印度雑事』六盟館: 東京

森田草平

[1914]: 編『戯曲シャクンタラー姫』日月社: 東京

[1930]: 訳「しゃくんたら姫」『世界大衆文学全集 第51巻』改造社: 東京

矢崎美盛

[1916]: 訳『印度文学史』(マクドネル著) 向陵社: 東京

山田恆子

[1994]: 「舍君多羅姫物語(土屋榛南) 解説」『アララギ』第87巻第3号

(1) J.L. ボルヘス著『続審問』(中村健二訳) 岩波文庫 2009年 204頁。なお、諸般の制約のため、本稿での註記は最小限に留めた。

(2) 金沢 [2006b]558-559 頁参照。

(3) この泉芳璟 [1917] は、金沢 [2011] の「泉芳璟教授著訳書論文目録」にも修正を迫るものでもある。

(4) 金沢 [2009] を目にされた、河口慧海の書誌学的研究の第一人者であられる高山龍三先生より、筆者が見逃していた泉芳璟 [1917] をコピーを添えてご教示いただいた。また別の日には、土屋榛南 [1994] と清水房雄 [1994a][1994b][1994c] をコピーを添えてご教示いただいた。さらに、『黄檗文華』誌に連載中の、詳細な河口慧海関連目録の抜刷を多数御恵授いただいた。記して心よりの感謝を申し上げたい。併せて、先生の今後の末永き活躍を祈念したい。先生より刊行の間近いことをご教示いただいた河口慧海 [2011] の詳細な検討を含めて、稿を改めて論じたいと思う。

(5) 筆者は金沢 [2009] の中で、心をこめて「今日まで継続的に発刊されている業界紙『中外日報』のバックナンバーがマイクロフィルムで簡単に閲覧できる。リーダーないしフィルムの限界だろうか、思うように判読出来ずに、解説そのものも円滑を欠くが、わが国近代のインド学仏教学の歴史を扱う研究者にとっては、まさに情報の宝庫である。」(408 頁) と記したのである。

(6) 金沢 [2009]445-446 頁参照。

(7) Cf.Kellner[1890].

(8) 金沢 [2009]410 頁註記 (16) 参照。

(9) 清水房雄氏は、高橋・小森 [1907] の実見に基づいて、「因みに、この本の巻末の広告には、「梵語戯曲シャクンタラー」があり、価が「二元」とある。この出版社はサンスクリットの本も発行していたわけであろうか。」(272 頁) と疑問を提起している。この「サンスクリットの本」は、高楠 [1903] を意味している。巻末広告の頁には「文栄閣発兌及発売書目」とあって、前川文栄閣発行の書物高橋・小森 [1907] の巻末広告に文明堂発行の高楠 [1903] が掲載されていても不思議はないと考える。

(10) ウィキペディアによれば、清水房雄氏については、「1915 昭和-平成時代の歌人。大正4年8月7日生まれ。五味保義にまなぶ。昭和13年「アララギ」にはいり、土屋文明の選歌欄に出詠。のち編集委員、選者となる。39年「一去集」で現代歌人協会賞。52年「春の土」で短歌研究賞。平成10年「旻天何人吟」で逍空(ちょうくう)賞。16年「独孤意尚吟」で斎藤茂吉短歌文学賞。20年「已哉微吟」で詩歌文学館賞。哀愁感のたどる身辺詠がおおい。千葉県出身。東京文理大卒。本名は渡辺弘一郎。歌集に「散散小吟集」など。」とある。

(11) 河口 [1924] には、Jones 訳も Williams 訳もともに「ナーガリ字體のものによれるもの」(下111頁) とある。Jones 訳はB本、Williams 訳はD本であるが、河口訳は非D本に依るものとしても、いわゆるB本の訳と言うよりは、むしろD本の翻譯に近い。B本、D本など、「シャクンタラー姫」の種々のサンスクリット原典に関しては、金沢 [2009]449-446 頁などを参照。

(12) Cf.Worsworth[2001].Introduction.

(13) Jones[1789] などの最初期の重訳者たちだけが、Dushmanta をその重訳に反映させることが出来た。例えば、Jones[1789] からのN.M.Karamzin によるロシア語の重訳 Karamzin[1792] には、Dushmanta, [ ], Kanna, Sakontala, Priyamvada, Anuzuja, Gautami, [ ] とある。筆者未見の G.Forster によるドイツ語の重訳 Forster[1791]、A. Bruguère によるフランス語の重訳 Bruguère[1803] に関しては、Figueira[1991], pp.83-87 などを参照のこと。なお本稿執筆中に入手できた Figueira[1991] は、その標題が示す通り、カー



リーダーサの戯曲「シャクンタラー姫」に対する、19世紀ヨーロッパに於ける翻譯の実態を探る上で貴重な研究成果であるが、詳しくは別稿にて論及したい。

<sup>(14)</sup> M.-Williams[1876]で Monier Williams が "*Mādhavya* (in the Beng. MSS. *Mādhavya*) is the *Vidūshaka's* name" (p.71,n.2) というように、「マーダヴィヤ」(B本)「マータヴィヤ」(D本)も、両者を識別するチェックポイントとなる。高楠[1903]、河口[1924]は、後者であり、高橋・小森[1907]や辻[1956]は前者で「マダヴィヤ」「マーダヴィヤ」である。

<sup>(15)</sup> 金沢[2009]433頁参照。

<sup>(16)</sup> 河口[2011]。やはり判読は容易ではない。

<sup>(17)</sup> われわれの研究の現場はいつの時代も似たり寄ったりということであろうか。どのような研究成果も、研究者と研究者の交流の産物としてとらえられるということである。それをうかがう第一級の資料となるので、それを復刻して本稿の附篇として、その全文を掲げたい。わざわざ筆者がその為にそれを打ち込んだのではなく、その資料を解説する作業が、結果的に打ち込み作業となっただけのことである。マイクロフィルムを読むのに大変な労力を要した、写本の解説と似たり寄っりの作業である。それを拡大複写すればよいのであるが、複写しても文字が判読できない。やはりリーダーの前にへばりついて、眼をしょぼしょぼさせて一文字ずつ解読して行くほか無かった。状態のいいフィルムや高性能のリーダーを使えばすいすい解読ははかどったかもしれないが、わたしの身近なところではそうした環境は望むべくもなかった。

<sup>(18)</sup> 例えば泉芳璟氏が紹介する高楠順次郎氏の言によって、前稿、金沢[2009]で謎として残された疑問点が明らかになる。すなわち、高楠順次郎氏による「シャクンタラー姫」の和訳は存在するのか否か、という疑問があるのである。金沢[2009]455頁&411頁註記(9)参照。

(本稿は平成19～21年度科研費補助金に基づく研究の成果の一部である)